

拡大科学委員会のための南アフリカ SBT 漁業の年次レビュー
2013年8月

1. はじめに

南アフリカのはえ縄漁業は 1960 年代初頭に始まった。ミナミマグロは、南アフリカ海域で漁獲される最も一般的な種の一つであり、1961-1967 年には 1,500t を上回る水揚げがあったと推定されている。漁業界は、ヘイクやイセエビのような、より儲かる他の漁業資源に関心を向けるといった発展に失敗した。それ以降、1970 年代から 2002 年にかけての南アフリカ海域におけるはえ縄漁業は、二国間協定の発効により日本及び台湾からの外国漁船に席卷された。これらの協定は、南アフリカ EEZ 内の水産資源は南アフリカによってのみ活用されるべきという意図のもとに 2002 年に失効した。マグロ及びカジキはえ縄漁業を実施するという南アフリカの新たな関心は、1997 年の試験はえ縄操業の設立という形で表面化した。南アフリカはえ縄漁業は、2005 年に商業漁業として正式化され、18 のカジキはえ縄漁業権及び 26 のマグロはえ縄漁業権が割り当てられた。追加配分は 2011 年に行われ、3 のカジキはえ縄漁業権及び 3 のマグロはえ縄漁業権が割り当てられた。このように、南アフリカはえ縄漁業の総努力量は、最大で 21 隻のカジキはえ縄漁船及び 29 隻のマグロはえ縄漁船に限定されている。

現在、南アフリカにおいて、ミナミマグロはカジキ及びマグロはえ縄漁船によってのみ漁獲されている。カジキはえ縄漁船は、南アフリカ EEZ 内で主にカジキ、キハダ及びメバチを漁獲対象とし、ミナミマグロを混獲として漁獲する国内漁船である。これらの漁船は、夕暮れ後、浮き延縄、餌イカ及び夜行棒を用いて操業する。はえ縄漁具はアメリカ式をベースにしており、すなわちモノフィラメントの幹縄を使用する。マグロはえ縄漁船は、キハダ及びメバチを漁獲対象としている。南アフリカでは、現在、当該漁業の相対的に「新しい」セクターが発展の途上にあり、この漁業に適した国内漁船が存在しないことに留意している。その上、南アフリカ人ははえ縄を用いてマグロを漁獲対象とする適切な技術を有していない。それ故に、船籍変更による適切な漁船の調達及び南アフリカ人への技術移転の機会の提供の手段として、外国漁船の用船に依存しているのである。

2012 年の大型浮魚漁業は、20 隻の国内カジキはえ縄漁船及び 11 隻の用船した日本マグロはえ縄漁船で構成された。当該漁期は、主要な対象魚種、すなわちカジキ及びキハダの漁獲量が著しく低く、標準的な漁期ではなかった。

対照的に、7月には過去ミナミマグロの漁場とは考えられていなかった南アフリカ東岸沖でも大量に漁獲されるなど、ミナミマグロの漁獲率が非常に高かった。ミナミマグロの大量漁獲のため、この種にかかる漁業は、カジキはえ縄漁船に関しては2012年7月17日に、マグロはえ縄漁船に関しては2012年8月1日に閉鎖した。

